

ART KISS LETTER

TITLE

ミュシャ展
マルチ・アーティストの先駆者

DATE 2024
2.10[Ⓟ] / 4.7[Ⓟ]

開館時間 10:00-20:00(展覧会入場は19:30まで)
休館日 火曜日



ミュシャ展

マルチ・アーティストの先駆者

プレトーク

「ミュシャ展」に先駆けて開催したプレトークの内容をお届けします。
展覧会担当者と公式アンバサダーが、ミュシャ作品についてお話ししました。

登壇者 富澤治子（熊本市現代美術館 主幹兼主査・学芸員）
糸永有希（RKKアナウンサー、「ミュシャ展」熊本 公式アンバサダー）

日時 2023年12月24日（日）14:00～14:30

会場 葛屋書店熊本三年坂



糸永:ミュシャ展のアンバサダーを務めている、RKKアナウンサーの糸永有希です、よろしくお願ひします！ 富澤さん、前売券の販売が始まったところですが、ミュシャ展開催への反響はいかがですか？

富澤:すでに多くの方から「チケットかわいいですね～」という声をいただいていますね！

糸永:グッズもかわいくて、特別感がある展覧会ですよ！

富澤:ミュシャが活躍した時代にも、シャンパンやビスケットの箱などさまざまなグッズが生み出されていました。ミュシャは商品広告に自分の作品を使った初めての画家だともいわれていますね。ミュシャは19世紀末、今から130年前くらいのフランスで活躍したアーティストで、最初に注目を集めたのは舞台用ポスターでした。当時のスーパーセブだった俳優のサラ・ベルナルが主演する演劇のポスターを手掛けた際にそれが大評判となり、ミュシャは一躍有名になりました。そのような背景があるので、現代においてミュシャ作品によるグッズが数多く展開されているのも、割と自然なことといえるかもしれません。

糸永:そうですね。一般的なアーティストが描く絵画のように、何かのきっかけで作品が広告に使われるようになったのかと思いましたが、ミュシャの場合は最初から広告として描いていたんですね。そしてやっぱり、一目見て吸い込まれてしまうような魅力がありますよね。

富澤:その魅力の源のひとつは、描かれた人物の着ている衣装がフォークロア調であったり、民族的であったりすることです。これには時代背景があって、もともとオーストリア＝ハンガリー帝国の一部だったチェコ・スロヴァキアが、第一次世界大戦後に独立するんですね。その流れにミュシャも大きく関わっているのですが、ミュシャはまだ国がなかった時代のチェコの出身なので、やっぱり自分の民族やアイデンティティの意識が強くあって、それをポスターなど多くの人が目にするものにも描き込んだんです。その作品が、中央ヨーロッパとは一味違う東ヨーロッパの雰囲気があるということで、人気を博したわけです。



左) ポスター「ジスモンダ」1894年 リトグラフ/紙
右) ポスター「メデア」1898年 リトグラフ/紙

糸永:激動の時代状況を全面的に出すわけじゃなくて、なにか「よいな」「かわいいな」と思う作品の背景に、そういった時代の空気や深い意味がそっと込められているんですね。背景を知っていくことでアーティストの思いに触れる、というのが、芸術の楽しいところでもあるのかなと思いました。

富澤:そうですね。それからミュシャは「アール・ヌーヴォー」を代表する作家であるともよくいわれます。「アール・ヌーヴォー」とはフランス語で「新しい芸術」という意味で、ヨーロッパ各地でそれぞれ特色があるんですが、優雅な曲線がたくさん使われていることや、日本風、ヨーロッパ中世の騎士物語風といった、いろんな要素がミックスされた雰囲気という点は共通しています。本展にはミュシャがデザインした「まさにアール・ヌーヴォー」というかんじのブローチも出展されていますが、これのレプリカが展覧会の限定グッズとして販売されるくらい、そのデザインは今の私たちの心にも届く魅力をもっています。そして今回の企画では、展覧会名のサブタイトルにもあるように、ミュシャを「マルチ・アーティストの先駆者」として位置づけています。

糸永:このサブタイトルに合わせて、YOASOBIさんの「ミスター」という曲がイメージソングに使われていますね。



パウダーボックス「七月」1900年
リトグラフ/紙

ブローチ「アザミ」1900年
金属細工/緑瑪瑙、銀



富澤:YOASOBIさんは、現代を代表するマルチ・アーティストの一組ですね。今では「アーティスト」という言葉は、音楽に関わっている方に使われることが多いかと思います。しかし、ミュシャが活躍した頃に「アーティスト」といえば、美術作品をつくる人だけを指す言葉でした。そして画家は画家、彫刻家は彫刻家というように、ジャンルを超えて活動する人はほとんどいなかった時代です。ミュシャはそんななかで、いわゆる画家の修業をしてからデビューした後、イラストレーターになって、俳優サラ・ベルナルのアーティスティック・ディレクターもするし、プロダクト・デザインも、パッケージ・デザインも、アクセサリーや切手や紙幣のデザインも手掛けています。ですので、現代的な感覚からいうと「マルチ・アーティストの先駆者」という呼び方は、本当にぴったりなのです。展覧会場では、それらの多様な作品をすべて見ることができます。その表現の幅の広さというのもミュシャの魅力のひとつです。

糸永:ミュシャの作品は、純粋にアートを楽しむだけでなく、「何か一つのことを極めるのもいいけれど、いろんなものに興味を持って広げていくことで活躍できる世界も待っているよ」ということまで教えてくれる気がします。そして、今回は音楽とのコラボレーションもお届けしようということで、会期中にリサイタルも開催するんですよ。

富澤:そうですね。ミュシャの作品は「音楽的」ともいわれています。そもそもアール・ヌーヴォーの特徴がそのようなものであるともいえますが、エンドレスなかんじで続く曲線がつくるリズムや、異国的・民族的なモチーフのちりばめられた装飾といったミュシャの絵の要素が、音楽におけるフレーズや主題がリピートされて印象が深まるかんじや、民族的な音階がアクセントに使われるのとイメージが重なるからでしょうね。

今回演奏される田中彩子さんと有島京さんの選曲がまた素晴らしく、いずれもミュシャと同じ時代を生きた作曲家たちの作品なのです。華やかなパリの雰囲気や反映した曲や、人々の心を代弁したような曲など、ご期待いただければと思います。ちなみに田中さんは、ミュシャの《四芸術：音楽》という作品をご自宅に飾っておられるそうです。

糸永:ミュシャの生きた時代を感じられる音楽が演奏されるということですね。リサイタルには私もナビゲーターとしてお邪魔する予定です。皆さんと一緒に楽しんでいけたらなと思っています。リサイタルのプレミアムチケットには展覧会の招待券もついてきますが、これは前売券や一般券とは違うデザインになっているんですよ？

富澤:はい、招待券は「四季」というミュシャの作品シリーズから「春」をピックアップして制作しています。ちなみに前売券では連作装飾パネルの「一日」というシリーズ作品を使っていますが、これはミュシャ芸術の完成形のひとつともいわれています。描かれた人物の衣装の色も、背景の色も、ピンクとか黄色とかオレンジとか、テーマカラーが決まっているんですね。戦隊ものの「○○レンジャー」みたいに、それぞれのキャラを色分けしてメッセージや属性が伝わりやすくしているのは、とても現代的な表現です。

糸永:私はピンクのデザインの「朝の目覚め」も、「夕べの夢想」のどこか眠たそうな雰囲気も素敵だなと思います。

そして《エリシュカ》という作品はまた雰囲気が違いますね。なんだか「かわいい」「きれい」というよりも、「力強さ」や「たくましさ」みたいな印象を感じます。

富澤:《エリシュカ》のモデルはミュシャの友人の建築家のお嬢さんで、彼女はアメリカ育ちでした。まさに今おっしゃられたように、「ニューウーマン」というかんじの力強さや元気さも含んだ作品ですね。当時はチェコ・スロヴァキアが建国してまもない頃で、またミュシャは自分の国や文化をとてん大事にしていたので、モデルの彼女が着ているのも民族衣装なんです。祖国への気持ちや自身のアイデンティティのようなものが、作品にしっかり表れています。スーパースターになった後も、自分のアイデンティティにつながる仕事も一生懸命やりたい、というミュシャの方向性がよく出ている作品でもあります。

糸永:こうやって多彩な作品を見ていくと、変化の見える部分と、一方で変わらない思いの部分と、両方を感じられるんだなと思いました。ぜひ、こういったところも会場で感じてもらえればと思います。

*本記録は、プレトークの内容を編集して再構成したものです
*掲載作品はいずれもチマル・コレクションより

誌面中央) 装飾皿「ビザンティン風の頭部：プロンド」1898年 エナメル塗装/金属



ルフェーヴル＝ウティール社ビスケット（ブドワール）缶のパッケージ 1900年 リトグラフ/金属、紙



油彩画「エリシュカ」1932年 油彩/カンヴァス

ミュシャ展関連企画「熊本市現代美術館コレクションにみるマルチ・アーティスト」

会期：2024年2月10日(土)–4月7日(日) 「ミュシャ展」会場内で開催

ミュシャ展に関連した小企画展として、熊本市現代美術館のコレクションから現代のマルチ・アーティストたちの作品をご紹介します。

「マルチ・アーティスト」とは、ジャンルを超えて活躍するアーティストという意味です。

ミュシャが生きた時代は、画家は画家、彫刻家は彫刻家というように棲み分けられ、創作者がジャンルを超えて活躍することはほとんどありませんでした。しかしながらミュシャは、画家の修業をした後、挿絵画家としてキャリアをスタートし、俳優サラ・ベルナルのポスターで一躍注目を集め、今でいう「アーティストック・ディレクター」として活躍。そしてパリ万博のパビリオンの壁画装飾、宝飾店の室内装飾、各種プロダクト・デザインやパッケージ・デザインを手掛け、さらにチェコスロヴァキア建国時には切手や紙幣のデザインを無償でおこない、晩年は画業に専念するなど、さまざまな分野で大きな足跡を残しました。また画家ゴーギャンや彫刻家ロダン

などとも交流し、最先端の刺激を与え合ったことも知られています。この小企画で紹介するマルチ・アーティストたち、天野喜孝、草間彌生、蜷川実花、横尾忠則らもまた、画家や写真家として活躍しながら、映画や舞台芸術、プロダクト・デザインなど多彩なジャンルでの仕事によって、常に世間の注目を集め続けています。それぞれが一目でわかる特徴的なスタイルと色彩を持ち、時にセンシユアルさを効果的に用いるなど、ひとの心をつかむビジュアル力を持っています。

ミュシャ作品とあわせて、現代のマルチ・アーティストたちの作品の魅力をぜひお楽しみください。



蜷川実花《さくらん》2006年
Cプリント、フォトアクリル 熊本市現代美術館蔵

EXHIBITION

ギャラリーⅢ
G3-Vol.154

CAMKコレクション
静物へのまなざし

会期：2024年2月28日(水)–5月27日(月)

当館のコレクションから、「静物」を扱った作品をご紹介します。少し注意してほしいのは、これは「静物画」の展覧会ではないということ。そうではなく「静物へのまなざし」ということについて、皆さんと考えてみようという目的で作品を選びました。本年夏、当館では「ガラスの器と静物画 一山野アンダーソン陽子と18人の画家」という展覧会を開催します。同展に先立ち、作品と静物の関係、「静物へのまなざし」とはどういうものかについて、立ち止まって考えてみたいと思います。



左から 石田澄男《想》《喜び》2007年 油彩、カンヴァス 熊本市現代美術館蔵



井手宣通
記念ギャラリー

CAMKスクリーニング Vol.1
山内光枝

会期：2024年2月28日(水)–3月31日(日)

国内外で活躍を続ける福岡在住の作家、山内光枝の中・長編映像作品のスクリーニング企画。

海辺にたたずむ裸の海女を写した一枚の古い写真との出会いをきっかけに、山内は十年以上にわたって海に生きる人々を追い続けています。山内は素潜り漁を営む人々と生活をとおして関係を築きながら、カメラを握ってともに海へと潜っていきます。海を基点とした彼らの生活に全身を使って迫るなかで、属性や観念にとらわれる以前の、人間の根源的なあり方に触れようとしているのです。

今回のスクリーニングでは、《つれ潮》と《信号波》という山内の近年の代表作2点を上映します。



山内光枝《つれ潮》2018年 シングルチャンネル映像 熊本市現代美術館蔵

熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol. 112(2024年2月)

編集：佐々木玄太郎 富澤治子 デザイン：橋本典(ピアフデザイン)

発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

